

百症例式 胃の拡大内視鏡×病理対比アトラス

小山恒男

佐久医療センター内視鏡内科部長

『百症例式 胃の拡大内視鏡×病理対比アトラス』の書評を依頼され、書籍が届いた。

まず、タイトルが長い。そして、表紙がチョットね。某アジア国の夜店に並んでいる本みたいである。

いやいや、本は内容が勝負。まずは序説を拝読した。何と、敬愛する八木一芳先生ではないか！ 急に興味が湧いてきた。

編集を担当した「拡大内視鏡×病理対比診断研究会アトラス作成委員会」とは、京都、奈良、神戸、岡山、高知で、独自に開催されてきた拡大内視鏡研究会の総称とのこと。八木先生、八尾建史先生、藤崎順子先生、小生など胃拡大内視鏡診断の第1世代ではなく、各地で拡大内視鏡研究会を企画発展させてきた、第2世代のリーダーたちが制作に当たった書籍である。

まずは、第I章の総論。胃観察の基本、胃癌病理の基本、切除標本の取り扱い、そして撮影法。実体顕微鏡があれば大変便利だが、買ってもらえない人でも、数万円のデジタルカメラで見事な撮影ができる。素晴らしい工夫である。

そして、第II章ではよりすぐりの18例が提示され、拡大内視鏡画像と病理組織像が見事に対比されてい

た。もちろん、champion caseを提示したのであろうが、常日頃から熱心に拡大内視鏡観察し、切除標本を愛おしく扱わねば、このような見事な対比はできない。各執筆者が、いかに情熱を込めて拡大内視鏡診断とESDに取り組んできたのかが、よく伝わってきた。

拡大内視鏡観察の作法は、フルズーム派と中拡大で表面構造を読む派に大別されるが、第II章に両派が混在していることも面白い。異なる師匠を持つ第2世代たちが、切磋琢磨して成長している姿が垣間見られる。

第III章のWebを用いた100症例の「百症例式」トレーニングでは、医学書院のWebシステムを上手に活用しており、まさに新時代の内視鏡アトラスと言える。

1990年代に手探りで拡大内視鏡の勉強を始めたが、もちろんテキストもアトラスもなかった。プロトタイプの拡大内視鏡で撮像した画像と、割入りの切除標本、組織像を1例1例対比して、表面構造と組織構築に関係があることを見出した。しかし、当時はEMR時代であり、分割切除標本では十分な対比は困難であった。「拡大内視鏡画像との対比が可能な、美しい一括切除標本を得たい！」。

これがESDの開発に取り組んだ動機であった。1990年代の後半に針状ナイフでのESDに取り組み、試行錯誤を経て手作りのHookナイフに至った。1999年に第1例目の食道ESDに成功した時は、その美しい切除標本に感動した。

切除標本と組織像を完璧に対比するには、まずは出血や焼灼のない、美しいESDを行うことが重要である。また、標本回収後にグズグズしていると組織融解が進み、きれいな組織像が得られなくなる。素早くピン打ちし、実体顕微鏡観察前に5分間ホルマリンの中へ入れることが肝要である。

この素晴らしい書籍を制作してくれた「拡大内視鏡×病理対比診断研究会アトラス制作委員会」のメンバーたちへ感謝申し上げる。皆さんは、もう若手ではない。今後は指導者として内視鏡診断学をさらに発展させ、第3世代を育成してくれることを祈念し書評を終える。

●B5/頁 288/2021 年 10 月

定価：6,930 円

（本体 6,300 円＋税 10%）

[ISBN978-4-260-04650-3]

医学書院 刊